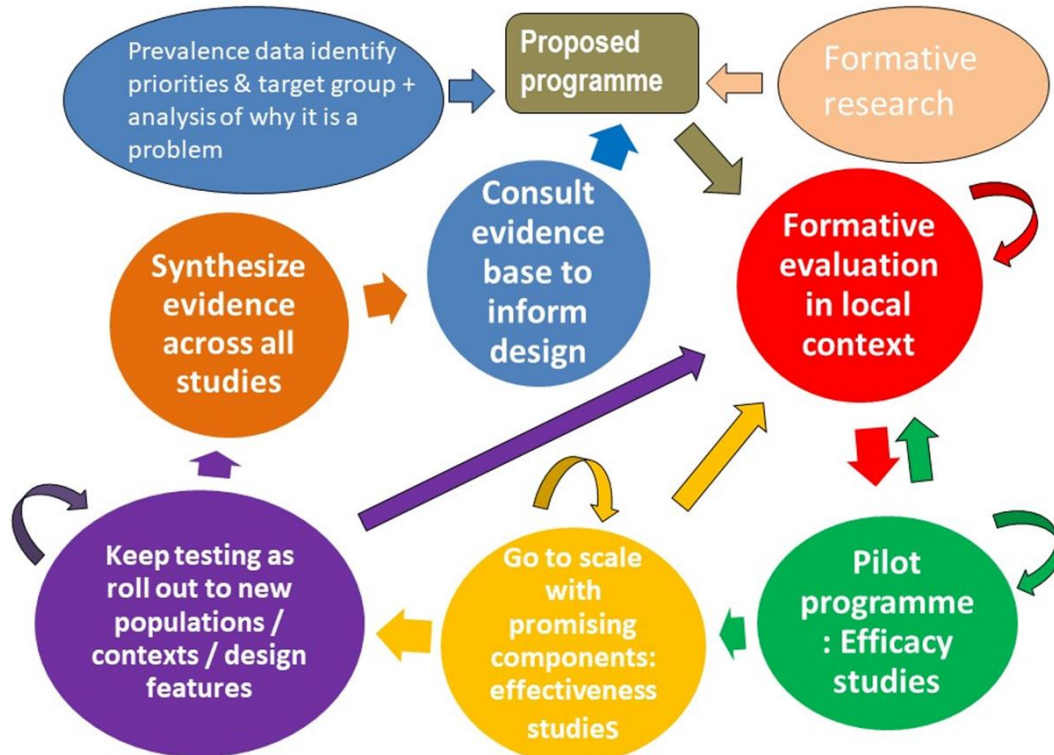


EBPM の着地点

青柳恵太郎（株式会社メトリクスワークコンサルタンツ）

■ EBPM の理想像



<https://campbellcollaboration.org/blog/the-evidence-based-project-cycle.html>

- ① データ（ファクト）に基づいて問題発見を行う。
- ② 問題を生み出している要因・構造を把握する。
- ③ 既存エビデンスを参照して有効な打ち手を探る。
- ④ 自身のコンテキストで、考案した介入が問題なく実施を行うことができるかを検証する。
- ⑤ 理想的な実施環境下で、考案した介入案が期待している効果を生むかどうかを検証する。
- ⑥ 効能検証を行った母集団に介入を一般展開した時の効果を検証する。
- ⑦ 母集団を超えた範囲に有効性が確立した介入を拡張していく。
- ⑧ つくられたエビデンスが既存エビデンスに追加され、次なる活用に使われていく。

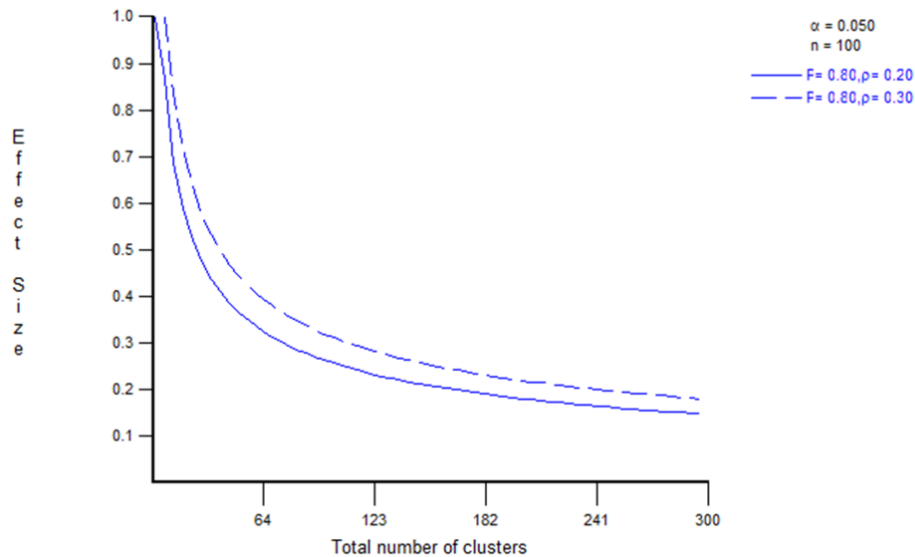
■ 既存エビデンス活用の「3つのない」

- ① そもそも、ドンズバなエビデンスがない。
- ② 適用可能性を判断できない。
- ③ 結局、適用可能性がない。

■ モデル事業を見直して自前でエビデンスをつくろう

- ① 教育現場の実施能力は高い。
 - Implementation Failure が生じる可能性は低い。
- ② 結局のところ、効能検証時のような実施環境での実践はない。必ず通常の現場で展開される。
 - 効能評価を挟む価値が低い。
- ③ 最終的な展開範囲は多くの場合、はじめから見えている。
 - 外的妥当性が広がるデザインを組める。

■ モデル事業の規模感



提案

多自治体共同ランダム化比較試験を実施しよう。